

# 0. 1. 2歳児の育ちを支える環境の工夫

## — 人と物の環境から子どもの育ちを考える —

○米園美里（フレーベル西が丘みらい園） 清水すみれ（同左） 柴田直美（同左） 汐見和恵（同左）  
石山幸恵（フレーベル館）

### 1. 研究目的

フレーベル西が丘みらい園は2018年の開園以来、「一人ひとりが大切にされる園」を保育理念に掲げ、子どもの主体性を大切にする保育を追究して来た。4年間の実践の中で見えてきたことを「環境」の側面から考える。

### 2. 研究方法

こどもの育ちに大きな影響を与える「環境」を「人的環境」と「室内（物的）環境」のそれぞれの側面から考察する。

室内環境については、一か月ごとに写真撮影をし、同時に保育者が何を考えていたかも合わせて記録した。

人的環境、室内（物的）環境が年齢によってどう変化して行くのか、子どもたちの育ちを通してを考察する。

### 3. みらい園の考える保育者の役割—人的環境

人的環境について、園として大切にしている事は以下の通りである。

一人ひとりを大切にという理念をもとに、園全体として大切にしていることはほぼ共通している。保育の中心は子どもたちであり、常に子どもの姿を真ん中に置こうと考えて、保育者は以下のことに注意している。

- ・遊びは五感を啓く事を意識し、0歳から実際に触れることを大切にし、多くの経験ができるように計画する。
- ・保育者はできるだけ落ち着いた立ち居振る舞いを心掛け、子どもの遊びを妨げない。
- ・保育者は声の大きさに気を付ける。話す時には近くへ行き小さめの声で話すことを意識する。保育者同士が子どもの頭上で言葉を交わさないようにする。
- ・子どもたちと話すときは「～だから、〇〇だよ」と理由を丁寧に伝えるようにし、子どもの不安をできるだけ取り除き、理解に繋げる。
- ・子どもからの発信には穏やかなトーンで応答的に対応し、できるだけ指示・命令・禁止の言葉を使わない。丁寧に言葉を紡ぐことで愛着関係・信頼関係を培う。
- ・子どもが挑戦する気持ちを見せたときは、余計な声をかけず基本的には見守るようにする。
- ・子どもとは対等な人間同士であるという立場から、援助の際も「手伝ってもいいですか?」と確認する。また、子どもたちが既に習得していることは、声をかけすぎないことも意識している。

以上のような考えの下、すべてのクラスがこれらの対応に力を注いでいる。

### 4. 保育者の実践を支える保育室の環境

みらい園における子ども主体の保育における環境構成については、年齢にかかわらず共通の考え方があ

- ・子どもの興味のあるもの・こと、子どもの発達に合わせて環境を考える。子どもの様子をよく見て、子どもが遊びこんでいる場合は大きく変える事はないが遊ん

でいないものは片づけ、遊びが広がらないときは環境を変える。

- ・季節感を大切にし、自然物や季節行事を味わう。
- ・危険性のあるものは予め取り除くが、大人にとって困る遊びや危険だと思われる子どもの行動や遊びは、止めるのではなく、環境を工夫して安全な状態で行えるようにしてできるだけ禁止しない。
- ・子どもの興味等に合わせておもちゃを手作りする。
- ・クッションやソファなど、子どもがゆったり休めるスペースやひとりになれるスペースを設定する。
- ・天蓋やパーテーションなどを使い、子どもが落ち着く空間を作る。
- ・できるだけ本物の素材、見立てられる素材を用意する。

考え方を共有することで、子どもの育ちを次のクラスにつなげやすくなっている。年齢ごとのポイントを記す。

(1) 0歳児室 —保育者との愛着関係を土台に五感を使った遊びを繰り返し経験できる心地よい環境—

0歳児室には絵本コーナーにパーテーションが1台あるだけで保育室内の仕切りは少ない。見通しのいい空間のため、保育者は子どもの様子や変化に気づきやすく、応答的なかわりがしやすい。子どもが保育者との愛着関係を築いていくうえでこの緩やかさが大切であると考えられる。また、見通しのいい空間にパーテーションが1台あることで、子どもはパーテーションの奥を探索したくなるように工夫されていると同時に、子どもが遊びや絵本に集中しやすいという面と、緩やかな仕切りであるため保育者や他の子どもの存在を感じられるという面がある。

子どもの興味や発達に合わせて環境を変えていくことは必要なことではあるが、慣れ親しんだおもちゃや絵本がいつもここにあるという状態を作ることが0歳児にとって安心できる環境であり、安心できる環境の中でこそ、五感を啓く遊びの経験につながっていく。

(2) 1歳児 —仕切られたコーナーで子ども一人ひとりが集中して遊べる環境—

年度当初は生活の動線をスムーズにするため、生活と遊びのスペースに分け、仕切りが少ない見通しのいい空間にしていた。子どもたちの成長に合わせて環境の変更と見直しをし、パーテーションの数を増やし、棚やパーテーションでコーナーを仕切り、カーペットを敷き、各コーナーのスペースを視覚的にも物理的にも分ける。各コーナーを小さく作ることで、子どもだけが入れるコーナーとしたことで、ひとり遊びの空間となり集中しやすい環境となった。大人の視線も遮る効果もあり、子ども同士のやり取りも増えていく。保育者が落ち着いて見守っていると子ども同士

の採め事にも適切な援助ができ、それもまた、遊びを広げていく事につながっていく。

(3) 2歳児 ——子ども一人ひとりの遊びや興味を深め・継続できる環境——

2歳児室は子どもの遊びに合わせてフレキシブルに変化していく。各コーナーは子ども2~3人分のスペースで、壁や棚、パーテーション、カーペットなどで仕切られており、子どもが遊びに集中できるようになっている他、一人で過ごせるスペースもある。子どもの興味が向かっていると思える時に、タイムリーに図鑑やおもちゃを用意する。子どもが身の回りのことを自分でしやすいような動線も確保するようにした。生活面でも遊びの面でも子どもがやりたいと思ったときにすぐに行ける環境が、子どもの主体性を育む環境に必要だと考えられる。また、ドキュメンテーションや、保育中の写真を壁に掲示して、活動や遊びに対する興味が継続するようにしている。子ども一人ひとりが遊びに集中し興味を深めたり、時にリラックスできる環境が用意されていることが、それぞれの遊びや興味、過ごし方を認め合える力を育み、小集団の遊びへと自然に発展していく。

## 5. 保育のかかわりと子どもの育ち

### (1) 0歳児の育ち

0歳児クラス後半期のNの育ちから考察する。Nは周りをよく観察しており、ごっこ遊びが始まっていた。特に人形が大好きで、おんぶをしたり、食事をさせる真似をし、部屋以外の場所にも持っていきたくて毎日主張していた。「泥んこになったらお人形さん可愛そうだから大切におんぶしようね」という言葉かけをすると「うん」と頷き、園庭では背負っている人形が汚れないように0歳児なりに気づかう姿がある。その後の食事の際にいつものように人形を席に持ってきて座ろうとしていたのに、汚れてしまうから置いてこようかと声をかけると、その日は「いやー！」と人形と一緒にいたいと主張する。「お人形さんとまだ一緒にいたいんだね、じゃあご飯食べたくなったらおいで、待ってるね」と声をかけ他児と先に食事を始める。しばらくすると自分から食事の席にもどってきて人形を椅子のそばに置き、自分は着座し食べ始めた。日頃から「~だから〇〇しようね」と伝えられていることを子どもはしっかりと理解して納得していることがうかがえる。「~だから〇〇しようね」と話しかけることは、子どもたちが物事には理(ことわり)があることを理解する。

### (2) 1歳児の育ち

1歳児は五感を使った感触遊びを中心に据えて色々な感触を経験することで物への興味が広がるようにした。Y君(1歳6か月のエピソードから)

1歳になってすぐに入園し保育園では初めての経験が多かった。感触遊びも周りの友達が楽しむ中、なかなか自分から手を出そうとしなかった。繰り返し色々な感触を味わえる環境を設定し、誘ったり、見守る中で自分から触ってみようとする意欲が出てきた。決して無理強いせず待つこと、その中でY君の心の動きを見逃さないことの大切さを感じた。4月から丁寧に言葉で伝える様にしてきたことで理解が深まり、友達の楽しそうな様子に関心を持てた

こと、保育者に温かく見守られる安心感をもって遊べることで、遊びへの興味関心につながったと思われる。

このような子どもの姿に合わせて、子ども自ら手に取りやすい場所におもちゃを置き、子どもがおもちゃを選択することこそが主体性だと考えている。ちいさなスペースの中でそれぞれが落ち着いてしっかり遊びこめることで全体が非常に落ち着き、「かみつき」が起きにくいことを実感。おもちゃもたくさん用意する必要はなく、片づけが子どもと一緒にできる範囲に留めると、子どもと共に整理整頓ができ保育者のイライラも減るという好循環を生む。

### (3) 2歳児の育ち

M(3歳1か月) S(2歳11か月)

0歳から一貫した「~だから〇〇しようね」の言葉がけのうけて、2歳児になると言葉を習得したことで、自分の気持ちを言葉で存分に表すことができるようになる。時にぶつかりあいも見られるようになった。ブロックをどちらが使うかでトラブルになった二人。「僕が先にとったから使いたいんだ」「Mも一緒に使いたかった」とお互いの主張をぶつける。しばらく保育者は二人を見守っていたがタイミングを見て仲裁に入る。保育者が二人の気持ちを尊重し受け止めながら、三人で考えるうちに子どもたちは自分の気持ちに折り合いをつけ、お互いに譲ることができた。

このような子どもの姿が見られるようになった背景には、2~3人が遊べる程度の仕切りを取り入れた環境設定があったことも大きい。遊びの中で友だちの存在を感じたり、一緒に関わって子どもだけの世界になるような空間を心掛けてきた。その中で友だちとの遊びを楽しむ姿があり、遊びこむうちに意見のぶつかり合いも起こる。今まで培ってきた保育者との信頼関係と見守られている安心感の上に、子ども同士の関係性を築こうとしているように感じ、保育者は子どもの様子に合わせて、関わり方(人的環境)や物的環境を整えることが大切であると感ぜられる事例であった。その後、トラブルが起きると他の子どもがそれぞれの気持ちを言葉にし、「Mちゃんも使いたかったんだって。二つあるから貸してあげれば」と提案をしながら折り合いをつける様子に発展していく。「~だから〇〇だね」という0歳からの言葉の積み重ねが感ぜられた。

室内環境は、その時々の子どもの様子をよく観察して、今、何に興味を持っているのかを把握してコーナーに生かし、つぶやきを拾いながらおもちゃを用意することで、何となく発したであろう言葉から興味深い探求へ発展していく事が沢山あった。

## 6. 考察と今後の課題

0歳からの丁寧な関わりと、成長に見合った環境を整えることが、子どもの成長を支える。保育園においては適切な環境整備こそ保育者の役割と考える。人的・物的両面の環境が整うと、子どもは主体的に遊び、保育が変わっていく事が分かってきた。「子どもの主体性を大切に保育」において環境整備は重要な意味を持つ。

みらい園における今後の課題は、以上を踏まえて、子どもがさらに主体性を発揮できるような環境の工夫と、子どもの生活や遊びの記録を、保育者とのかかわりを含めて丁寧にすることによって、検証していく事である。